

厚生科学研究研究費補助金  
新興・再興研究事業

新興・再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究

平成12年度 総括研究報告書

主任研究者 竹田 美文

平成12（2000）年3月

目 次

I. 総括研究報告書

新興・再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究————— 1

竹田美文

(資料) ①平成12年度終了課題

②平成13年度新興・再興感染症研究事業における課題採択方針

③平成13年度厚生科学研究費補助金(新興・再興感染症事業)継続研究計画課題一覧

II. 分担研究報告

1. 新興・再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究 ————— 7

小竹久平

2. 新興・再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究 ————— 8

岡部信彦, 谷口清洲

3. 新興・再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究 ————— 13

小坂健

厚生科学研究費補助金（新興・再興研究事業）

総括研究報告書

新興・再興感染症研究事業の企画と評価に関する研究

主任研究者 竹田 美文 国立感染症研究所長

研究要旨

新興・再興感染症研究の専門家からなる委員会を設け、新興・再興感染症研究事業の適正かつ円滑な実施を図った。

分担研究者

小竹久平，岡部信彦，谷口清州，  
小坂 健（以上、感染症研究所）

A. 研究目的

諸外国の新興・再興感染症研究に劣らぬ研究を実施するためには、適切な課題の設定、最適な研究者の選考、公正な研究費の配分、そして厳密な研究成果の評価が必要不可欠であり、感染症研究の専門家からなる委員会でこれらを行う。

B. 研究方法

新興・再興感染症研究の専門家である委員会（以下「専門委員会」という。）組

織し、1) 研究者の選考及び研究費の配分額の決定、2) 研究課題の設定、及び3) 研究成果の評価を行った。

C. 研究成果

- 1) 平成12年度終了課題10件の評価を行った。
- 2) 平成13年度新興・再興感染症研究事業における課題採択方針（案）を策定した。
- 3) 平成12年度の継続研究課題37件の中間評価を行ったところ、37件が適切に進められていた。

① 平成 12 年度終了課題

主任研究者	所属施設	職名	研究課題名
飯野 四郎	聖マリアンナ医科大学内科学	教授	非 A 非 B 型肝炎の臨床的総合研究
山本 三郎	国立感染症研究所細菌・血液製剤部細菌製剤第一室	室長	結核症及び非結核性抗酸菌症における生体防御機構の解明とその予防・診断・治療への応用
阿部 千代治	(財)結核予防会結核研究所基礎研究部	部長	薬剤耐性結核のサーベイランス、耐性の分子機構および多剤耐性結核の治療に関する研究
大村 智	(社)北里研究所	理事・所長	抗マラリア剤の探索研究
宮村 達男	国立感染症研究所ウイルス第二部	部長	感染症発生動向調査等に関する研究(我が国におけるポリオ根絶宣言のための小児 AFP サーベイランス体制の確立)
田村 慎一	国立感染症研究所感染病理部	室長	粘膜免疫機構の基盤と応用
渡辺 彰	東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍研究分野	助教授	Q 熱による呼吸器感染症の国内での発生状況および病像に関する研究
小熊 恵二	岡山大学医学部細菌学教室	教授	食餌性ボツリヌス中毒および乳児ボツリヌス症に関する研究
平井 克哉	岐阜大学農学部	教授	リケッチアによる新興・再興感染症の疫学、診断および予防に関する研究
吉澤 浩司	広島大学医学部衛生学	教授	非 A 非 B 型肝炎の予防、疫学に関する研究

② 平成 13 年度新興・再興感染症研究事業における課題採択方針

- 1 ツベルクリン検査、BCG 等に代わる結核等の抗酸菌症に係る新世代の診断技術及び予防技術の開発に関する研究
- 2 野生げっ歯類及びダニ類に由来する感染症の予防、診断及び疫学に関する研究
- 3 食品に由来する感染症発生時の原因究明のための実地疫学調査方法の確立に関する研究
- 4 粘膜ワクチン開発の基礎となるアジュバントに関する研究
- 5 成人麻疹の実態把握及び今後の麻疹対策の方向性に関する研究
- 6 その他新興感染症及び再興感染症に係る疫学的研究並びに予防、診断及び治療に関する研究であって、重要性及び緊急性が特に高いもの

③ 平成13年度厚生科学研究費補助金(新興・再興感染症研究事業)継続研究計画課題一覧 (単位:千円)

NO.	開始	終了	主任研究者	フリガナ	所属施設	職名	研究課題名	平成12年度 交付決定額
1	12	14	渡辺治雄	ワタナベハルオ	国立感染症 研究所細菌 部	部長	パルスフィールドゲル電気泳動法(Pulsed-Field Gel Electrophoresis, PFGE)の標準化及び画像診断を基盤とした分散型システムの有効性に関する研究(H12-新興-3)	26,000
2	12	14	岡部信彦	オカベノブヒコ	国立感染症 研究所感染 症情報センタ	センター長	効果的な感染症発生動向調査のための国及び県の発生動向調査の方法論の開発に関する研究(H12-新興-4)	26,000
3	12	14	鈴木重任	スズキシゲトウ	(福)黎明会 南台病院		国及び県の発生動向調査の連携及び海外の調査定点設定に関する研究(H12-新興-5)	21,000
4	12	14	倉田 毅	クラタケン	国立感染症 研究所	副所長	感染症診断・検査手法の精度管理並びに標準化及びその普及に関する研究(H12-新興-6)	30,000
5	12	14	小室勝利	コムロカツシ	国立感染症 研究所安全 性研究部	部長	未知の感染症のリスク評価に関する研究(H12-新興-7)	11,000
6	12	14	山本保博	ヤマモトヤスヒロ	日本医科大 学付属病院 高度救命救 急センター	主任教 授、部長	大規模感染症発生時の緊急対応の在り方に関する研究(H12-新興-8)	22,000
7	12	14	宮城島一 明	ミヤキシマカス アキ	京都大学大 学院医学研 究科社会予 防医学講座 公衆衛生学	助教授	感染症及び感染症対策の国際的動向に関する研究(H12-新興-9)	11,000
8	12	14	森 亨	モリトル	(財)結核予 防会結核研 究所	所長	再興感染症としての結核対策確立のための研究(H12-新興-10)	45,000
9	12	14	森島 恒雄	モリシマツネオ	名古屋大学 医学部保健 学科	教授	インフルエンザの臨床経過中に発生する脳炎・脳症の疫学及び病態に関する研究(H12-新興-11)	26,000
10	12	14	神谷 齊	カミヤヒシ	国立療養所 三重病院	院長	乳幼児に対するインフルエンザワクチンの効果に関する研究(H12-新興-12)	26,000
11	12	14	田代 真人	タシロマサト	国立感染症 研究所ウイルス 製剤部	部長	新型インフルエンザ対策に関する総合研究(H12-新興-13)	30,000
12	12	14	熊本 悦明	クマモトヨシアキ	札幌医科大 学医学部泌 尿器科学教 室	名誉教授	本邦における性感染症のセンテナル・サーベイランスとそれに関する基礎的検討(H12-新興-14)	26,000

13	12	14	品川 森一	シナガワモリス	帯広畜産大学畜産学部獣医学科獣医公衆衛生学教室	教授	プリオン病の診断技術の開発に関する研究(H12-新興-15)	25,000
14	12	14	神谷 正男	かヤマサオ	北海道大学大学院獣医学研究科寄生虫学教室	教授	エキノコックス症の監視・防御に関する研究(H12-新興-16)	26,000
15	12	14	鈴木 守	ススキマモル	群馬大学医学部	教授	マリアの病態疫学・流行予測及び感染動向に関する研究(H12-新興-17)	18,000
16	12	14	太田 伸生	オオタノブオ	名古屋市立大学医学部医動物学	教授	日本住血吸虫等世界の寄生虫疾病の疫学及び予防に関する研究(H12-新興-18)	18,000
17	12	14	池 康嘉	イケヤスヨシ	群馬大学医学部微生物学講座	教授、薬剤耐性菌実験施設長	新型の薬剤耐性菌のレファレンス並びに耐性機構の解析及び迅速・簡便検出法に関する研究(H12-新興-19)	24,000
18	12	14	荒川 宣親	アラカワヨシチカ	国立感染症研究所細菌・血液製剤部	部長	薬剤耐性菌の発生動向のネットワークに関する研究(H12-新興-20)	24,000
19	12	14	吉倉 廣	ヨシクラヒロシ	国立国際医療センター研究所	所長	院内感染の発生リスクの評価及び効果的な対策システムの開発等に関する研究(H12-新興-21)	21,000
20	12	14	吉川 泰弘	ヨシカワヤスヒロ	東京大学大学院農学生命科学研究科	教授	輸入動物が媒介する動物由来感染症の実態把握及び防御対策に関する研究(H12-新興-22)	24,000
21	12	14	上原 至雅	ウエハラヨシマサ	国立感染症研究所生物活性物質部	部長	輸入真菌症の診断・治療法の開発と発生動向調査に関する研究(H12-新興-23)	21,000
22	12	14	岩崎 琢也	イワサキタクヤ	国立感染症研究所感染病理部感染病理室	室長	重症エンテロウイルス脳症の疫学的及びウイルス学的研究並びに臨床的対策に関する研究(H12-新興-24)	24,000
23	12	14	名取 泰博	ナトリヤスヒロ	国立国際医療センター研究所臨床薬理研究部	部長	新興する細菌性腸管感染症の診断・治療法の開発と発生動向調査に関する研究(H12-新興-25)	24,000
24	12	14	武田 直和	タケタナオカス	国立感染症研究所ウイルス第二部腸管感染ウイルス第一室	室長	食品由来のウイルス性感染症の検出・予防に関する研究(H12-新興-26)	21,000

25	12	14	浜田 茂幸	ハマダシゲユキ	大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座(口腔細菌学教室)	教授	劇症型レンサ球菌感染症の病態解明及び治療法の確立に関する研究(H12-新興-27)	18,000
26	12	14	山井 志朗	ヤマインロウ	神奈川県衛生研究所細菌病理部	部長	髄膜炎菌性髄膜炎の発生動向調査及び検出方法の研究(H12-新興-28)	15,000
27	12	14	増澤 俊幸	マスサワトシユキ	静岡県立大学薬学部微生物学教室	助教授	回帰熱、レプトスピラ等の希少輸入細菌感染症の実態調査及び迅速診断法の確立に関する研究(H12-新興-29)	18,000
28	12	14	松岡 正典	マツオカマサル	国立感染症研究所ハンセン病研究センター生体防御部第1研究室	室長	ハンセン病感染の実態把握及びその予防(後遺症の予防を含む)・診断・治療法に関する研究(H12-新興-30)	40,000
29	12	14	国包 章一	クニカネショウイチ	国立公衆衛生院水道工学部	部長	水道水のクリプトスポリジウム等による汚染に係る健康リスク評価及び管理に関する研究(H12-新興-31)	24,000
30	12	14	倉根 一郎	クラネイトロウ	国立感染症研究所ウイルス第一部	部長	節足動物媒介性ウイルスに対する診断法の確立、疫学及びワクチン開発に関する研究(H12-新興-32)	21,000
31	12	14	安居院宣昭	アグイノリアキ	国立感染症研究所昆虫医科学部	部長	疾病媒介昆虫の侵入・移動分散の監視・防御に関する研究(H12-新興-33)	21,000
32	11	13	岡田 全司	オカダマサジ	国立療養所近畿中央病院臨床研究部	部長	抗結核キラー-Tリンパ球とリコンビナントBCG-DNA-ワクチンの開発による新しい予防・診断・治療法(H11-新興-2)	30,000
33	11	13	相川 正道	アイカワマサミチ	東海大学総合科学技術研究所	教授	抗マalaria薬の複合投与による相乗効果に関する基礎的研究(H11-新興-3)	10,000
34	11	13	北 潔	キタキヨシ	東京大学大学院医学系研究科	教授	新規抗トリハノーマ薬アスコフランの実用化(H11-新興-4)	36,000
35	11	13	竹内 勤	タケウチツトム	慶應義塾大学医学部熱帯医学・寄生虫学教室	教授	わが国におけるアメーバ症の実態の解明と対策確立に関する研究(H11-新興-5)	20,000
36	11	13	牧野 壯一	マキノウチ	帯広畜産大学畜産学部獣医学科家畜微生物学教室	助教授	炭疽菌の発症機構の解明と迅速検出法の確立(H11-新興-6)	20,000
37	11	13	林 英生	ハヤシヒデオ	筑波大学基礎医学系微生物学	教授	サルモネラの診断・予防法の開発(H11-新興-7)	20,000



新興・再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究

分担研究者 国立感染症研究所 小竹久平

要 旨

研究評価法に関して特に国内の他の研究事業の評価法について、文献収集をし、比較検討し、新興・再興感染症研究事業の評価に有益な知見を得た

A. 研究目的

本研究は厚生科学研究の一環である新興・再興感染症研究事業の評価を適切に行うために、その評価のあり方について検討することを目的とした。

B. 研究方法

評価手法に関する文献及び国内の他の研究事業の評価に関する資料を収集し、それらをレビューし、比較検討した。

C. 研究結果

一般的な研究評価の枠組みあるいは構成要素は次のものがある。

評価対象：個人、機関、国、研究プロジェクト等

評価目的：予算配分、研究継続の可否、研究の軌道修正等

評価時期：事前、中間、事後

評価者：自己評価、他者評価（同一機関内、外部専門家、外部非専門家）

評価指標・方法：主観評価、客観評価（ビブリオメトリックス等）

評価基準：学術性、実用性

個々の研究評価はこれらの組み合わせにより行われる。このうち特に問題なのは評価指標・方法における主観評価と客観評価である。研究評価は学力試験などと異なり客観的データのみではできない。ビブリオメ

トリックスは学術性の評価に客観的指標を

与えるものとして非常に重要であるが、真理の追究それ自体を研究目的とする研究とは異なり、その研究成果を行政施策に反映させようとする新興再興感染症研究事業のような実用性を重んじる研究の評価にはバイオメトリックスの活用は限定される。結局、評価というものは最終的には評価者の主観的価値判断に頼らざるを得ない。現在、新興・再興感染症研究事業のみならず、厚生科学研究全体で客観的評価の努力が行われているが、未だ、その成果を行政施策に反映させようとする新興・再興感染症研究事業のような研究の評価のための客観的指標は無い。今後の課題である。

D. 結論

新興再興感染症研究事業の評価を適切に行なうための評価手法について、有益な所見を得た。また、今後の課題としてその成果を行政施策に反映させようとする研究事業の評価のための客観的な指標を開発する必要性が認められた。

厚生科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）

分担研究報告書

新興再興感染症研究事業の企画および評価に関する研究

主任研究者 竹田 美文 国立感染症研究所所長  
分担研究者 岡部 信彦 同上感染症情報センター長  
谷口 清州 同上室長  
共同研究者 砂川 富正 同上研究協力員（FETP）

研究要旨 本研究班は、諸外国の新興再興感染症研究に劣らぬ研究をわが国で実施するために、適切な課題の設定、最適な研究者の配分、厳密な研究成果の評価が必要不可欠であり、感染症研究の専門家からなる委員会で行う必要がある、として組織された。分担研究者は、このうちアジア地域における新興再興感染症研究領域の分析を担当し主任研究者のその資料を提出する部分を担当したので、その内容を報告する。

A. 研究目的

本研究班は、諸外国の新興再興感染症研究に劣らぬ研究をわが国で実施するためには、適切な課題の設定、最適な研究者の配分、厳密な研究成果の評価が必要不可欠であり、感染症研究の専門家からなる委員会で行う必要がある、として組織された。分担研究者は、このうちアジア地域における新興再興感染症研究領域の分析、ことに WHO 西太平洋地域事務局(WPRO)における実施およびその連携の可能性の調査、および海外における感染症対策を知るための一貫としてフィリピンにおける感染症サーベイランスの状況などについて調査を行い、新興再興感染症研究事業の企画および評価に関する研究班に対して、研究遂行のための資料を提供することになった。

B. 研究方法

我が国は WHO 西太平洋地域(WPR)に属しており、この地域での新興再興感染症の流行は、我が国に重要な影響を及ぼし得ることは、最近のマレーシア・台湾におけるエンテロウイルスによる小児の急性死、香港におけるトリ型インフルエンザウイルスのヒトでの流行的発生、マレーシアにおける新しいウイルスであるニバウイルスによる日本脳炎様疾患の多発、中国における野生ポリオウイルスによる麻痺患者の出現等、多くの実例が挙げられる。これらに対する総合的対策の一環として、アジアにおける感染症サーベイランスシステムの確立、流行的発生に対する緊急的対応、これらの疾患に関する基礎的研究に関する情報交換を、電子的なネットワークを確立して行

おうという動きが各国であり、またこれについて WHO ことに同地域においてはマニラにある地域事務局(WPRO)が大きな役割を担う可能性がある。そして我が国はこれらの動きに対する貢献が期待され、また求められているところである。さらにこれらの新興再興感染症対策は、海外への貢献のみならず、国内における感染症対策としても重要である。

このため今回は、世界ことに WPRO における新興再興感染の現状に対する認識を知り、意見交換・情報交換を通じてこの地域特有の新興再興感染症対策の重点課題および WHO の方針を把握することを目的とし、WPRO を訪問することとした。WPRO では、尾身地域事務局長、J.Billous 感染症部長、押谷感染症予防対策課長などと会談を行った。

分担研究者は当初本研究班の補助を受けてニパウイルス・エンテロウイルスへの対応のためにマレーシアへの訪問を予定していたが、平成 11 年 7 月マレーシアで開催されたニパウイルス対策に関する WHO 専門家会議に出席、平成 11 年 10 月同じくクアラルンプールで開催されたマレーシア国政府の感染症危機管理に関する研修会に講師として出席、また同年 12 月に東京で開催されたアジア地域における感染症に関する国際会議に出席の機会があり、それぞれの機会に同国担当者との意見交換などを行っているためマレーシアへの出張予定を変更し、マニラ訪問を予定していた主任研究者に代わって総合的意見交換を行うために WPRO を訪問したものである。

なお本研究成果の一部は、本研究班以外の研究班の支援も受けている結果であり、したがって報告内容の一部は、他研究班への報告内容と一部重複する。具体的には、(厚生科学研究-新興再興感染症- 感染症及び感染症対

策の国際的動向に関する研究 主任研究者・宮城高一明) との一部重複である。)

倫理面への配慮：本研究では、個人のプライバシーにかかわるような研究ではないので、特に配慮等はない。万一個人的情報が本研究の中に含まれる場合には、それに関する機密保護に万全を期するものである。

### C. 研究結果

1973 年以来明らかになった新興感染症とみなされる新しい感染症とその病原微生物は 30 種類以上が上げられている。最近では 1997 年香港でこれまでにヒトからは分離されたことのなかったトリ型インフルエンザウイルス(A/H5N1)が分離され、新型インフルエンザウイルスによる地球的規模での流行(pandemic)の前兆ではないかと世界中から注目を浴びたが、幸いに香港政府における適切な対処(感染源となった鶏 150 万羽の殺処分)により、1997 年 12 月末以降に新たな患者発生は見られていない。さらに 1999 年マレーシアでは、当初日本脳炎を疑わせた急性脳炎の流行から新たなウイルスとして Nipah virus が見出されているが、これもマレーシア政府による適切な対処(感染源となったブタ 100 万頭の殺処分)により、これまでのところ新たな患者の発生は見られていない。再興感染症とみなされる疾患として、劇症型 A 群溶連菌、百日咳、サルモネラ、クリプトスポリジウム、ペスト、ジフテリア、狂犬病、デング熱、マラリア結核などがあげられている。

#### 【WPRO】

H5 インフルエンザ、ニパウイルスなどは WPRO 地域で生じており、WPRO はこれに取り組むとともに、加盟国の一つであるわが国

との協力は不可欠であると考えている。具体的には、感染症サーベイランスの強化、ことに国際的連携なかでも WPRO 地域におけるネットワーク作り、何らかの感染症の流行的発生(アウトブレイク)時への対応である。WPRO では、従来これらは伝染性疾患予防対策課 (CDS: Communicable Diseases) が主になって担当をしていたが、その機構に変化を加え、現在では感染症サーベイランスおよび対応課 (CSR; Communicable Disease Surveillance and Response)を設置、担当としている。

CSR では、

- 1) 加盟国内での感染症サーベイランスの強化、新しいサーベイランスシステムへの取り組みと地域内での連携とネットワーク作り、情報の還元方法の改善、実験室診断の強化、など、
- 2) アウトブレイクに対して、WHO としての技術支援、専門家の派遣、対応に必要な器材の供給、国際協力に関する仲介、適切な情報の提供、など

を重要な事項としている。

### 【フィリピン】

フィリピンについては、保健省感染症サーベイランス担当課および FETP (Field Epidemiologist Training Programme)課にて、説明を受けた。

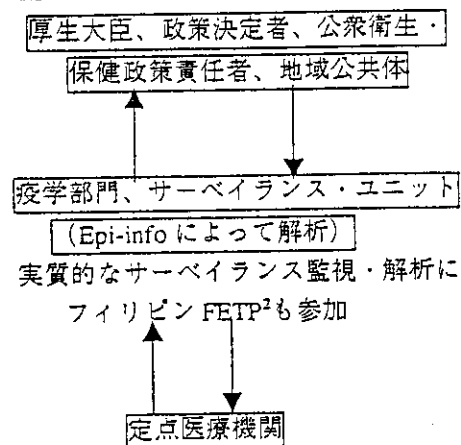
概要：国内 16 地域で実施している公的医療機関の定点を基盤とした国家レベルのサーベイランス National Epidemic Sentinel Surveillance System (NESSS)が行われている。その目的は  
1) 集団発生の可能性のある 14 の感染症発生のモニタリング 2) フィリピン厚生省の情報システムの一環を担う ことにある。フィリピンにおいては FETP の歴史がすでに 10 年以

上あるが、FETP はこのうちの限られた対象疾患について、臨床現場に赴いて全数の把握を行っている。

報告に必要なデータ：

- 1) 病院名
- 2) 患者氏名
- 3) 性別・年齢
- 4) 入院日
- 5) ワクチン接種状況 (接種日、接種場所)  
\*EPI対象疾患のみ
- 6) 死亡の有無

報告の流れ：



NESSS によって得られる主な情報：

- 1) 疾患流行の時間的推移
- 2) 症例の地理的特徴
- 3) 症例の予防接種率
- 4) 症例死亡率 (Case Fatality Ratio) の推定
- 5) 地理的な症例の集積状況
- 6) 病因仮説を構築する情報

NESSS によって得られない情報：

- 1) 真の症例発生率 (incidence)

1 EPI: Expanded Program on Immunization (拡大予防接種計画)

2 FETP: Field Epidemiology Training Program (実地疫学専門家養成コース)

## 2) 眞の症例分布 (prevalence)

対象疾患：

- ・ 病原体診断を要する感染症 (5 種類)
  - 1) コレラ
  - 2) A 型肝炎
  - 3) 結核
  - 4) マラリア
  - 5) チフス熱
- ・ 臨床診断を要する感染症 (8 種類)
  - 1) デング熱 (DF)
  - 2) ジフテリア
  - 3) レプトスピラ症
  - 4) 髄膜炎球菌髄膜炎
  - 5) 新生児破傷風
  - 6) 新生児以外の破傷風
  - 7) 百日咳
  - 8) 狂犬病
- ・ EPI 対象疾患 (2 種類)
  - 1) 麻疹
  - 2) 急性弛緩性麻痺 (AFP)

## D. 考察と結論

我が国は WHO 西太平洋地域(WPRO)に属しており、この地域での新興再興感染症流行は、我が国に重要な影響を及ぼし得ることは、最近のマレーシア・台湾におけるエンテロウイルスによる小児の急性死、香港におけるトリ型インフルエンザウイルスのヒトでの流行的発生、マレーシアにおける新しいウイルスであるニバウイルスによる日本脳炎様疾患の多発、中国における野生ポリオウイルスによる麻痺患者の出現等、多くの実例が挙げられる。これらに対する総合的対策の一環として、アジアにおける感染症サーベイランスシステムの確立、流行的発生に対する緊急的対応、これらの疾患に関する基礎的研究に関する情報交換を、電子的なネットワークを確立して行おうという動きが各国であり、またこれにつ

いて WHO ことに同地域においてはマニラにある地域事務局(WPRO)が大きな役割を担う可能性がある。そして我が国はこれらの動きに対する貢献が期待され、また求められているところである。さらにこれらの新興再興感染症対策は、海外への貢献のみならず、国内における感染症対策としても重要である。

すでにわが国および国立感染症研究所は、エンテロウイルス感染症 (マレーシア、台湾)、トリ型インフルエンザ (香港)、ニバウイルス発生 (マレーシア) などにおいて分担研究者らを派遣し、調査対応に協力貢献を行っているところであるが、今後さらにその連携が必要であることを、WPRO 側と確認をした。ことにサーベイランスの強化、支援は地域の問題と同時に自国 (わが国) 自身の問題でもあり、国際貢献とともに国内における感染症危機管理の上で重要であることが再認識された。

国立感染症研究所においては、平成 11 年 9 月より、実施疫学調査員研修コース (FETP: Field Epidemiologist Training Course) を国際的に通用するレベルで開始しているが (共同研究者 砂川は、その一期生)、国内的にも国際的 (地域的) にもその強化が重要であることも改めて認識された。すでにラオスにおける下痢症 (コレラ) 発生への対応、中国におけるポリオ様麻痺 (AFP) 調査、中国における WHO 会議開催への支援など、わが国の FETP の活動は国内対策のみならず国際的貢献および WPRO 活動への協力をおこなっているが、これらは同時に FETP のいわゆる on the job training につながっており、さらに今後の連携がさらにスムーズに、また双方にとって実のあるものに行くように WPRO および分担研究者間で引き続き検討を続けていくことが確認

された。

またサーベイランスの連携についても、WPROにおけるネットワーク作りには、日本のシステムの良い意味での利用と、今後の国際間の共同作業の中への積極的な協力が必要であり、いくつかのシステムが出来つつある中、これらの適切な調整がWPROによって行われるべきことを提言した。

フィリピンの感染症サーベイランスに関しては、システムの構築がなされてはいるものの、医療インフラの未整備から来る、診断、報告、集計などに問題があり、また情報の還元に関しては、一般に公開をするまでには至っていない。FETP制度への取り組みは早く、システムとして順調に進められてはいるが、情報の収集と分析までの段階であり、データの有効な利用、還元、及び感染症対策の根幹のデータとして利用されるまでにいたっていないようであった。今後の更なる整備充実が必要であるが、サーベイランスシステムが十分に導入されていないアジア地域にとっては、一つのモデルとなり得るため、その点での支援がフィリピンにとって必要であろうと思われた。またこれらへの支援は、WPRあるいはもっと広い意味での国際的貢献として重要であるが、そのことはひいては自国（わが国）の感染症危機管理対策上、重要なことであり、今後も継続して情報の交換を行ってゆくこと必要があると考えた。

#### E. 研究発表

1. 日本及び世界における感染症と行政における対策-感染症新法の施行と感染症サーベイランスの実施- 岡部信彦 小児内科 32(1):7-13, 2000.
2. 小児の新興再興感染症：輸入感染症 岡部

信彦 小児科学会雑誌 104(1):15-16, 2000.

3. 輸入感染症 岡部信彦 標準感染症学 P.145-159 編集 斎藤 厚、那須 勝、江崎 孝行 医学書院 2000.3.
4. ニパウイルスによるアウトブレイク（マレーシア 1999年） 岡部信彦、森田公一 ウイルス 50(1):27-33, 2000.
5. 香港におけるトリ型インフルエンザの発生 岡部信彦 インフルエンザのすべて P.123-127 編集：岡部信彦 新興医学出版 2000.7.
6. サーベイランスから推測される新型インフルエンザウイルス発生の可能性 岡部信彦 小児科診療 63(12):2134-2137, 2000.
7. 感染症サーベイランス 岡部信彦 集中治療 12(12):1316,-1325, 2000.
8. フィリピン渡航後デング熱・ジアルジア症（4類感染症）を合併した14歳男児の1例 宮塚幸子、難波広行、和田靖之、久保政勝、熊谷正広、大伴弘士、高崎智彦、山田堅一郎、倉根一郎、岡部信彦 第74回日本感染症学会総会 2000.4.20-21. 福岡市

## 新興再興感染症研究事業の企画及び評価に関する研究

分担研究者 国立感染症研究所 感染症情報センター

小坂 健

### 要旨

感染症研究の企画及び評価について、現在他の領域で行われている評価手法(米国におけるサーベイランスの評価及びプロジェクトサイクルマネジメント)を検討した

#### A: 研究目的

研究あるいはプロジェクトの評価ということでは、米国や日本でも一部の領域ではシステムとして確立されており、感染症における研究の評価などについてもこういった他領域での方法が参考になるためにこれらを文献的にレビューした。

#### B. 研究方法

文献的なレビューを元に海外や国内での評価方法や企画方法などについて検討した。  
検討したものは以下の通りである。

- 1: サーベイランスの評価について(CDC)
- 2: プロジェクトサイクルマネジメント(PCM)

#### C. 研究結果

1: サーベイランスの評価について  
評価の観点は以下の通りである。

■サーベイランスからの情報によってなされた事は？

■方針決定や施策化に用いられたものは？

■以下ができるか

- 流行状況の変化を検出
- 流行を検出
- 死亡率・有病率の推定
- 予防施策に有効な研究を導く
- リスク要因を特定
- 予防施策の効果評価

- 治療方法の改善を誘導属性の評価としては

■ 代表性; 実際の発症状況と報告との比較  
性・年齢・居住地・社会経済特性など

■ 感度

■ 特異度

■ 検出力

■ 簡便性、柔軟性、受け入れ、

2: プロジェクトサイクルマネジメント(PCM)

PCMは(財)国際開発高等教育機構 FASID が開発した開発援助のための手法であるが、その手法は現在参加型計画手法(Participatory planning)とモニタリング・評価手法(monitoring and evaluation)が開発されており、特に後者は効率性、目的達成度、インパクト、妥当性、自立発展性などの観点から評価を行うこととなっている。

#### D. 結論

国内の感染症研究やサーベイランスにおいても今回検討した評価方法やマネジメント手法をとり得ることが可能であることが分かった。

#### E. 健康危険情報

#### F. 研究発表

なし。